

シノギ屋・救急車・仕事

はじめに

今年も第16回釜ヶ崎越冬闘争実行委員会のとをうけ、釜ヶ崎キリスト教協友会（以下協友会と略）は、1月11日～2月28日まで、毎日、夜十二時から約一時間半にわたって、釜ヶ崎地区およびその周辺（浪速区・天王寺区）で野宿する労働者をたずね、事情をきき、必要に応じて、ミソ汁、毛布、カイロなどを渡しました。その実態は、一覧表にまとめました（表参照）。

この夜間パトロール活動で気付いた点をあげると次の通りです。

(1) シノギ屋（路上強盗）が例年になく多くパトロール中、ほぼ毎日、シノギ屋にやられケガをし、金をまきあげられたと沢山の労働者から、訴えがありました。しかも共通していることは、警察に訴えても全然相手にされないことでした。労働者の中には、シノギ屋にやられ、やむをえず野宿している者も決して少なくありませんでした。シノギ屋がいなければ、冬の様相も幾分変わっているだろうと想像できます。

(2) 高齢者、病人やケガ人の訴えを聞いて救急車を呼びましたが、そのまま入院治療をうけることが出来た労働者は、少数で、ほとんどの人々は、簡単な治療をうけたあと、再度、寒風ふきすさぶ外へ追いかえされました。そんな結果を知っているので、かなり重症の場合でも救急車にのることさえ拒否する労働者

がいました。野宿の原因の一つは、このような医療体制、もうけ中心主義の現在の医療と深く結んでいます。

(3) 野宿者と仕事の有無は深く関係していることが、パトロールの記録から読みとることが出来ます。野宿者の数は、二月平均は一月平均より一日あたり10人少ないということがその証拠です。一月末から二月にかけて、釜ヶ崎には沢山の仕事がありました。決して労働者は怠けて野宿しているわけではありません。次にパトロール日誌に残された記録を紹介します。

パトロール日誌から

11日(土) 晴 10日で第16回越冬実の闘いが終る。本日からキリスト教協友会のパトロールが始まる。越冬実の闘いが終わったのを知らない労働者がいる。

12日(日) 晴 センター前、三角公園の野宿者がふえている。

13日(月) 晴 早朝、東京山谷争議団リーダー（映画「山谷」の監督）、新宿の路上で金町一家の組員にピストルで射殺される。

14日(火) 曇 三角公園に3名シノギ屋がいた。医療センターには中毒患者（酒の臭いなし）がいて、フラフラと千鳥足。北コースには野宿者がふえた。

15日(水) 晴 新今宮駅構内には、木刀や棒をもったシノギ屋が2名いた。野宿者は、越冬以前の状態にもどった模様。

1985~'86 越冬パトロール ①

釜ヶ崎周辺の野宿労働者

1月 11日~31日計2,906人1日平均138人

2月 1日~29日計2,592人 〃 127人

1月	天候	釜ヶ崎の野宿者			パトロール参加者	野宿者に渡したものの		
		南	北	計		毛布	ミン汗	カイロ
11	晴	83	51	134	35人	70	60	36
⑫	晴	101	48	149	13	70	110	57
13	晴	91	16	107	12	29	72	83
14	曇	95	41	136	40	50	110	65
15	晴	103	62	165	11	33	90	20
16	晴	93	36	129	12	26	58	45
17	曇	118	57	175	18	40	98	40
18	晴	83	69	152	26	36	67	30
⑬	晴	120	46	166	30	34	98	67
20	晴	97	52	149	18	13	15	15
21	雨	108	67	175	24	35	61	-
22	曇	75	56	131	24	25	-	-
23	晴	67	60	127	26	30	64	80
24	晴	65	46	111	14	30	48	33
25	晴	69	71	140	43	30	87	35
⑭	晴	91	58	149	29	40	80	60
27	晴	60	51	111	15	-	-	-
28	晴	83	53	136	11	40	59	-
29	晴	74	53	127	11	-	-	-
30	曇	51	61	112	15	40	66	38
31	晴	64	61	125	18	23	62	56

16日(木) 晴 あたたかく、トラブルなし。ただし、食物がほしいという人あり。
 17日(金) 曇 新今宮駅前でNさんシノギ屋にやられる。三角公園では、Hさん救急車に乗るのを拒否。
 18日(土) 晴 新今宮駅前でKさんシノギ屋にやられる。Hさん、病院紹介のため旅路の里を紹介するが来ず。結核のWさん、いこの家に一泊し、19日朝、救急車で医療センターへ行く。
 19日(日) 晴 医療センター前、三角公園で野宿者がふえている。パトロール参加者が

同じ曜日に続けて来てくれれば、天王寺公園方面にもパトロールに出かけることが出来る。
 20日(月) 晴 時間帯によって野宿する人たちの状況が異なるので、パトロールの時間帯を変えてはどうか。本日から23日まで、フランススコ会正義と平和協議会現場研修。
 21日(火) 雨 雨のため商店街に野宿者が多い。北コースでは、新今宮駅下集まっている。野宿者、へる傾向なし。
 22日(水) 曇 三角公園にシノギ屋がウロウロしている。「三年常より野宿者が減っているように思う」と一参加者の声。クリン

作戦の結果か。

23日(木) 晴 浪速区日本橋デンデンタウシ(電気製品商店街)には、高齢の人たちが寝ていた。パトロール参加者が多かったので日本橋、天王寺公園方面をまわる。

24日(金) 晴 「道路がきれいになった」「新今宮駅(南海線)の線路ぞいに野宿者がふえた」との参加者の声。仕事中、肩に鉄骨でケガをした労働者が野宿していた。

25日(土) 晴 南コースでシノギ屋にやられた労働者はいなかったが、北コースでは4~5日前にシノギ屋にやられ野宿している労働者に会う。治ったら仕事に行くと言う。

26日(日) 晴 風が冷たいので野宿者の場所が移動している。南コースでは、シノギ屋にやられた労働者に会う。天王寺公園では、野宿者に対して立退き勧告が、大阪市公園局より出されている。野宿者は、持物を何回も没収されている。

27日(月) 晴 「出会いの家」に一人宿泊
 28日(火) 晴 西成署の前に結核患者が何も持たず野宿していたのでフトンを渡す。シノギ屋にやられ鼻がつぶされた労働者のために救急車を呼ぶ。

29日(水) 晴 三角公園は、シノギ屋が多いので寝ない(野宿しない)と労働者が言う。線路沿いの植込みの中に寝ていた労働者は、「明日、日雇労働に行く」と答えた。

30日(木) 曇 雨のあとで布団をぬらした労働者が、日本橋方面には多かった。天王寺

駅構内には、13人もかたまつて野宿していた。
31日(金) 晴 センター前では、なぐられたYさんが片目を充血させていた。明朝炊き出しの会に行くよう紹介。パトロール中に労働者から一〇〇〇円のカンパがあった。布団をあてにしている人も多い。

2月1日(土) 晴 三角公園で救急車を呼ぶが労働者意識なし(名前不詳)。参加者が多く(48人)、リーダー2人では対応できない。救急車2台呼ぶが、2人とも入院出来ず。治療のみ。

2日(日) 晴 野宿でも寝るのではなく、外を歩き廻っている人が増えている。

3日(月) 晴 3人の労働者が泊るところがなく歩いてきた。南コースは、野宿者が少ない。

4日(火) 晴 三角公園になぐられ顔をはらした労働者がいた。口の中は血だらけ。北コースでは、寝ている間に煮えた油をかけられ大ヤケドをした労働者に出会う。治療。

5日(水) 雪 野宿する72歳の老人2人から相談があった。北コースでは野宿がふえている(註2月6日朝、判明したのだが、2名の労働者が行路死。うち一人はパトロール中に布団をかけた労働者)。京都越冬実から支援に来る。

6日(木) 晴 日本橋周辺ではよく寝ている人が多かった。

7日(金) くもり一時雪 警察がケンカでケガをした人のために救急車を呼ぶ(2月8

日朝、三角公園西角トイレ横の布団の中で労働者が死亡しているのが発見された)。

8日(土) 晴 酔ってシノギ屋にやられた労働者など、被害者が多い。

9日(日) 晴 三角公園でシノギ屋にやられた労働者は、自彊館の診察券を持っていたので、自彊館に送りとどける。H病院から強制退院させられ、野宿しているKさんに会う。

10日(月) 晴 結核のSさんに明日10時の救急の話をしておく。

11日(火) 晴 医療センター前でたき火をしていた。

12日(水) 晴 医療センター前の野宿者いつもの半分。老人のI(67歳)、O(63歳)O(67歳)、S(70歳)いずれも野宿。3人には、アフターケアが必要。

13日(木) 曇のち雨 医療センター前の野宿者が少ない。「生きることはすごいことだ」と参加者の声。

14日(金) 雨のち曇 野宿する結核の労働者に出会う。日本橋、天王寺公園コースでは、病院を自己退院した労働者に会う。H(45歳)さん、T(46歳)さん。どうすれば医療ルートにつなげるか。

15日(土) 晴 Yさん、Fさん、Tさんの3人のため救急車を呼ぶが、治療のみで3人も帰される。とくにTさんについても同じことがあったと救急隊員が言う。

16日(日) 晴 医療センター前の野宿者が少なくなる。北コースは、南コースよりシノギ屋が少ない。

17日(月) 曇 救急車3台呼ぶ。とくに12時すぎの人は、既にドウコウが開いていた。

18日(火) 雨 医療センター横にH病院を自己退院をした結核のHさんが野宿していた。雨のためいつもと違う場所で野宿している。

19日(水) 晴 三角公園の野宿者が多い。

20日(木) 晴 北コースでは、Oさんに明日愛徳姉妹会に行くように声をかける。三角公園では2人組のシノギ屋風の人を見る。

21日(金) T(36歳)さん、シノギ屋にやられて四〇〇円とられる。天王寺コースでは昨夜交番から救急車でA病院に行くも一晩で追い出されたNさんに会う。

22日(土) 晴 一時期集中していた北コース(南海沿線)の野宿者は、布団だけで、あまりみかけない。パトロール出発前中横で小型トラック炎上。

23日(日) 晴 三角公園は、閑散としている。北コース、12時すぎ新今宮駅を追い出された老人が寝る場所を求めて歩いている。

24日(月) 晴 ケンカのためか労働者が血だらけ。しかし、治療などのケアはいらないと言う。三角公園にはシノギ屋グループ

25日(火) 晴 結核の労働者に入佐さんのことを紹介する。

26日(水) 小雨 シノギ屋にやられた労働者2人に出会う。うち一人(41歳)は、頭を

わられていた。パトロール参加者計51人と今期最高。リーダーとして戸迷いを感じる。

1985～86 越冬パトロール

2月	天候	釜ヶ崎の野宿者			パトロール参加者	野宿者に渡したのもの		
		南	北	計		毛布	ミン汁	カイロ
1	晴	81	68	149	48人	30	100	30
②	晴	89	53	142	33	-	-	-
3	晴	54	69	123	-	-	-	-
4	晴	57	70	127	18	40	56	20
5	雪	59	68	127	25	20	45	-
6	晴	54	45	99	17	38	64	60
7	曇	70	63	133	19	20	58	60
8	晴	70	69	139	26	30	69	51
⑨	晴	79	59	138	24	-	-	-
10	晴	66	83	149	36	-	-	-
11	晴	81	53	134	13	30	77	-
12	晴	54	69	123	15	-	56	32
13	雨	75	51	126	15	40	72	24
14	曇	73	58	131	39	40	82	70
15	晴	59	80	139	21	30	74	69
⑬	晴	74	52	126	35	-	-	-
17	曇	53	60	113	13	19	-	-
18	雨	55	61	116	20	60	60	-
19	晴	65	61	126	22	40	45	-
20	晴	67	65	132	13	45	74	74
21	晴	95	61	156	39	31	56	-
22	晴	60	69	129	18	25	43	85
⑭	晴	70	57	127	38	-	-	-
24	晴	37	47	84	15	-	-	-
25	晴	68	66	134	22	-	-	-
26	雨	56	73	129	51	-	-	-
27	雪	62	53	115	22	53	73	37
28	晴	62	38	100	53	-	-	-

27日(木) 小雪 明日でパトロールは終りが、少々寒いので大丈夫だろうか。「雪の中で野宿せざるを得ない労働者とうどう連帯できるか」との参加者の声。

28日(金) 晴 萩ノ茶屋商店街でシノギ屋にやられた労働者を救急車で運ぶ(意識不明)2日前にシノギ屋にやられたと訴えるSさんに喜望の家紹介。K(47歳)さんは、自彊館を追い出されたと言う。聞けば結核とのこと。

むすびにかえて

以上のように49日間、一日も休まず夜間のパトロールが出来たのは、釜ヶ崎の労働者の現実をおぼえ、具体的に体を釜ヶ崎に運び、あるいは、金品の支援を続けてくださった方々がいたからです。毛布は、少々不足でしたが、足りないナァーと思うと送られて来ました。また、49日間、パトロールの拠点として使わせていただいた旅路の里にも感謝しなければなりません。さらに、その日の仕事を終え、早朝の仕事をひかえながら一緒にパトロールに参加して下さった日雇労働組合のみさんの支援も忘れることは出来ません。しかし、わたしたちは、野宿する労働者も

精一杯頑張っている姿に何度も出会いました。その幾つかを紹介したいと思います。

2月6日朝、わたしたちは、2月5日深夜に声を掛けふとんをかけた人が、死亡したというショックな出来事に出会いました。そこで、パトロール中は、出来るだけ声をかけ、一人一人の労働者の事情を聞くという方針をとりました。そんな中で出会ったのが、結核で野宿していたMさん(51歳)です。Mさんは、2月14日、パトロールが終わった後、シノギ屋に寝ているところを襲われ、腰を蹴られ二、三〇〇円を取られました。病院へ運びましょうかと言うと一緒に野宿している者が助けてくれるので、自力で頑張るといいます。パトロール班は、せめてもの助けにと食事運びました。そして、一週間後には、自分で社会医療センターに行き、入院その他の手続きをしたのです。わたしたちの働きは、労働者の意志を尊重し、信頼するところにはじまるのです。また、ある野宿する労働者は、夜間のわたしたちのパトロールに対して、「ご苦労さん」と言って千円カンパしてくれました。聞くと今日は、仕事に行き金が入った。とにかくカンパしたいので受けとってくれとさし出すのです。野宿しながら、パトロール隊に対して、その日の賃金八、五〇〇円から千円をさし出す労働者の気持ちをご共有できるでしょうか。いろいろ学んだ一九八六年冬でした。

今年はどうするか

藤田節男

「味噌汁を配った時、労働者の人がとても優しい声でありがとうと言ってくれたのが、印象的でした」とでも書けばいいのだろうか。

感想文を書く事を二つ返事で引き受けたものの、何を書いたらいいのか自分の中で全く整理されていないのに気づいた。

三角公園でたき火にあたりながら獲物を狙っているシノギ（路上強盗）に対して惜しげもなく毛布を配ってしまう我々のパトロール配られっぱなしで商店街の片隅にゴミとして捨てられる毛布達。いや「パトロール」という言葉

さえ、労働者を「浮浪者」と呼ぶのが差別であると同様に人を見下した表現なのかもしれない。

今年も寒い冬がやって来る。凍てついたアスファルトの上にも何もしずに着ている労働者の姿の前では僕の言葉など吹き飛ばされてしまう。

今年はどうするのか？

いつも繰り返されるこの問いには、労働者が何故アオカンを強いられるのか、自分は自分の場所まで何ができるのかを考えていく以外に答はでないだろう。

感性の麻痺

足立 こそえ

牧師から釜ヶ崎の越冬パトロー

ルに参加を呼びかけられて、毎週とまでは行けなかったが、真夜中のパトロールについて出かけていった。たまたまその夏に日キ教団出版局主催の「教師の友」セミナーで、釜ヶ崎の日雇労働者の話しを聞いた記憶と、マスコミなどで、労働者の二、三の活動を見たり、また仕事で年に一、二度訪れる程度で、釜ヶ崎との関りということとは全くなかった。逆に初めて、仕事で釜ヶ崎を通りぬける時には、とまどいがあった。それはただ、お昼に道を通りぬげるだけのことであるのに。

一年中そこには、家でなくて道にうずくまりながら野宿しているオッチャン達に合った。人並みの生活から排除された事実が、そこにあった。人間としての生き方さ

え否定されて、物のように扱われていた。もう どんぞこ。何も感じない自分の感性が、これほどまでも日常生活の中で麻痺しきっているのかと思わされた。

今は少しづつ、毎日の生活の中でオッチャン達のが、自分の中からだのどこかに住むようになって来ている。冬場は雨の時が一番気にかかった。だから友人や近所のおばちゃんに声をかけた。いらんようになつた毛布やふとんがあれば、ちょうだい。

どうしたらいいのやると考える。自分の出来ることしか出来ないから、又釜ヶ崎へ行かなあかんと。

「ありがとう」と言われて

小柳 選

野宿する 労働者群

一九八六年一月一日〜二月二八日の夜間のパトロールには、平均して毎回二〇人前後の人々が参加してくださいました。十年近く支援し続けた人、あるいは今年はじめての人もいます。その中から何人かの人に労働者との出合いを書いていただきました。

僕は、今年度のパトロールが、初めての参加でした。今回のパトロールで、たくさんの事を知り、学びました。これらは、今日の高校教育では、絶対に学べないものです。その点からも、僕自身たいへん良い経験をしたと思っています。たくさん知った中で、今だによく考える事があります。それは

労働者が私たちに言ってくれる言葉——ありがとう——の意味の受けとめ方です。初めてパトロールした時、ありがとう——と言われて、僕自身とても嬉しかったです。でもその時の嬉しく感じたのは、自分の心に、労働者に対して助けてあげているという気持ちがあったからでしょう。今思うととても恥かしく思います。そんな気持ちに對して労働者が——ありがとう——と言っているのではないことに気が付きました。何十回と——ありがとう——と聞いているうちに、少しずつ自分なりに——ありがとう——という言葉の意味が受けとめられてきました。その言葉の中には、労働者のやさしさだけでなく、共に戦うという気持ちも、こもっているように受けとれました。もっとも、深い意味があるのかもしれないが、僕はいつも労働者から言われるたびに「共に戦っているんだよ」という労働者の気持ちが伝わってきます。でもこれらがほんとうに良い受けとめ方なのかと悩むときもあります。ただ労働者自身が私たちに助けてもらっているんやという気持ちがあるんじゃないか。だから——ありがとう——

と言っているのかなと思ったりした時もありました。しかし、パトロールをしていて労働者と話し合っていると、そんなことは、ありえないと伝わってきました。だから僕も、いつも——ありがとう——と言いかえします。この——ありがとう——という共に戦うための共通語をいつまでも、いいあえるあいだでいたいなと思っています。これからも、一年中、いろんな事に参加してたくさんの事を知り学んでいきたいと思っています。

野宿を余儀なく されていく人々たち

前 島 道 代

青カンしている人今日は一五〇名、きのうは二〇〇名でしたとの報告を聞きパトロールを終えて家に帰り用意しておいた温かい寝床へ。おじさん達は寒空で野宿、何か申訳ない気がするな——と真喜子。
おじさん達にお味噌汁を渡した時、何度もお礼を言われる度に、自分の無力さを感じてしまう——

と容子。

毎冬、こんなにも多くの人達が、野宿を余儀なくさせられている現実を目の前にして、どういふ事なんでしょう、自分と、どう関りがあるんだろう、自分には、何が出来るんだらうという問いを、突き付けられます。ほんのちょっとのお手伝いしかしていませんが、釜ヶ崎で、青カンする人達が、そして凍死する人が、無くなるまで、関らせてもらいたいと思っています。

野垂れ死に

上 河 能 子

パトロールでまわっている時、ふとんをしいて、毛布をかけて、ちゃんとケアしたつもりで労働者が、翌日、朝、その場所で死んでいる。
どう見ても、衰弱している労働者に、救急車を呼ぶ。翌朝、その人がはこばれた病院に問いあわせるところ、「外科に運ばれましたが、入院する必要がないので、すぐに出てもらいました。」衰弱している人が何故、外科に回された

の？ 「結核でしんどい。どーにかしてくれ。」と訴えかけ、倒れかけそうになった労働者に救急車を呼ぶ。翌朝、病院に問いあわせると、「入院の必要がないので、出しました。」

「結核」って強制入院しなきゃいけないんじゃないの？

パトロールにまわるたび、労働者がまるで人間扱いされていない事実を思い知らされた。労働として使える時は、使い放題。使えなくなるとすぐ様、お払い箱。その人たちはそのまま『野垂れ死に』——社会に殺されていく——

自分の中に、むなしさと怒りばかりが込み上げてきた。「毛布やみそ汁を配っても、それがいったい何になるというの？ 一人ぼっちで死んでいく人は、死んでいってしまう。死んでしまっじゃないの？」
黙って野垂れ死ねな——
——やられたらやりかえせ——
それまでは、自分の頭の中を素通りしていたこの2つの言葉が、

今年の春、自分の胸に刻みこまれたように思う。要は、自分のこれからの生き方だ。

釜ヶ崎との出会いの中から

一九八五年度「第11回越冬セミナー」は
84年12月31日～85年1月3日まで、ふる
さとの家、旅路の里を会場に開かれた。
これは、参加者有志の感想の一部である。

「僕は逃げたくない」

山崎博之

期待と不安の中で

宇仁菅 一郎

私は日雇労働者の人たちの問題に、我々障害を持つ者の問題との共通項を、人間や医療や労働の問題を通して実感させられました。それと、パトロールをしながら感じたことは、リヤカーで寝たり、ちゃっかりベッドを確保して寝たり、ベニヤ板などで風よけを作って寝るなどの工夫をこらした姿は、私のようなもの、いや、一般の多くの人たちには考えることのできない、自分の命を守り、寝場所を確保し精一杯生きている人の生き様を見た感じがしました。さて、私にとって釜ヶ崎とは、お互いの心と体を触れあって共に生きていくことを分かちあえる所であると思います。そういうふうに参加して、また、考える中で、私たちの弱さの中に働きたもう神の祝福があると確信しています。あるクリスチャンの人は「釜ヶ崎は恐い所やから、いかんほうがあええで」と、釜ヶ崎を知らない人は、そういうふうに言う人も中にはいます。それが、よく言われる、自分の心の中に釜ヶ崎をつくらないう事です。それは疎外感や一種の差別であると思います。実際の釜ヶ崎はさみしくて、苦しくて、その日暮らしの生活がやっとの人たちが、回りの支援の暖かい手に包まれて、精一杯生きている場だと思います。

釜ヶ崎で一番強く感じたのは、釜では人が殺されようとしているという事でした。仕事も金もドヤもなく、青カンせざるをえない労働者、捨てられたメシに灰を入れられている労働者。セクターで数百人のおっちゃん達が、寝ているのを見た時は強いショックを、受けました。僕は観念的に、下層労働者を踏みつけにして生きている自分というものを認識していましたが、実際に釜に来てみて、それが一回壊されたように思います。それを軽々しく口に出来ない程、釜の現状は厳しいものでした。シノギにあって血を流しているおっちゃんを前に、茫然と立っている自分の存在というものは、一体何なんだと、強く思われました。その問いかけから、僕は逃げたくないと、今思っています。

越冬セミナーを終えて

山田玲子

セミナーの三日間の中でまず感じたことは、釜ヶ崎の問題は地域性の問題であると思っていたのだが、日本全体、働く人全体の問題であるという事だ。スラムの再開発によって新たに問題が生まれたという事は聞いたことがあったが、再開発の方法さえ正しければ、解決される問題であると思っていた。しかし今の日本の社会の構造

では地域が整備されることでは解決できない。それが釜ヶ崎の労働者の人たちの青カンなのだなあと思った。階級的な労働者の世界、一番弱い立場の人の上に成立っているにもかかわらず、一番最初に弱い人たちが切りすてられる。そして、あいつらはなまけ者だから外で寝ているんだ、という冷たい目……。

アジアと釜ヶ崎

古屋 淑子

高校の時から、「アジアで働きたい」という夢を持ち続けながら大牟田という地で釜ヶ崎の様に、日本の社会から排除されている人達のことを、少しずつ学ぶ機会があり、そして、今ここで、釜ヶ崎を自分の肌で感じて、なにかこう、自分の中で言い続けてきた「アジア」というものが鮮明になってきた様な気がします。初めて見た機動隊による日本の管理社会の縮図、アルコール中毒の恐しさ、労働組合の活動のチームワーク、釜ヶ崎における医療活動の実態、そして何よりも、おじさん達のあたたかみ、これらをしっかりと、十九歳の胸に焼きつけておきたいと思います。

三角公園

河野 昭信

もちつき、炊き出しの一杯の汁、互いに持っている力を出しあって、それを分かち合う。三角公園全体は初代教会を思い起こさせると共に、小教区にない本当のミサが三角公園で開かれていると思ひ感激した。小さな人々、貧しき人々の中に神がお生まれになって、それに出会うことなしに人間としての生き方は出来ないと思う。最後に、弾圧を受けながら目夜、徹底的に労働者と共にいきている組合役員の人々を動かしているものは何なのか。何故、あれほど勇気が出てくるのか、それは、私以上に神と出合い、神の歴史を知

っているからではないかと、ふと思った。私は将来、農業をしたいと思っていますが、本当に勉強になりました。

「大丈夫ですか……」

安永 絹子

私は、その人達のために、はたして何ができたろうか。青カンを強いられていた人達に、毛布を掛け「大丈夫ですか……」ただそれだけだった。私はセミナーが済めば、屋根のある畳の上でぬくぬくと寝てしまおう。セミナーの間中、喫茶店や食堂で、食べたい物をたらふく食べるのだ。これがはたして苦しみを共にすることになるだろうか。

これは、私のこれからの大きな課題である。私の生活の中で、そして信仰の中で、それに問いかけ、私のものにして行きたいと願う。

実感としての釜ヶ崎

坪井 健一

釜ヶ崎へ来てみると、この抱える問題の大きさが、それまでとは比較にならぬ程に実感として迫ってきました。問題の象徴の第一は、三角公園を封鎖・監視する、機動隊と私服・制服警官の姿でした。テレビや書物から、警察のこのような姿があるという知識は得ていましたが、いざ身辺に警官隊を見つみると、闘志が湧くというより圧倒される感じでした。釜ヶ崎の労働者を圧殺しようとする力が働いていることを膚で感じました。その感じは、三角公園からの移動を阻止された時に最も強くなりました。もう一つの象徴は、労働者の姿です。青カンをする人、酒を多く飲む人、体を壊している人などを実際に見ると、会社勤めや役所勤めなどの人との違いをまざまざと感じさせられました。ただでさえ労働条件が劣悪なのに、それに追い打ちをかけるような状態なのです。



協友会通信 4 1985年冬

釜ヶ崎キリスト教協友会

代表 薄田昇

557 大阪市西成区萩之茶屋3-1-10
ふるさとの家内

連絡先

釜ヶ崎キリスト教協友会連絡事務所
☎〇六二六四二一八二七三

カンパの
代替番号 大阪六一三〇五五九九
送り先

釜ヶ崎キリスト教協友会

釜ヶ崎の冬と協友会の活動に支援を

はじめに

本年三月十七日日曜の夜の越冬総括集會で、才十五回釜ヶ崎越冬闘争支援活動は終了しました。越冬闘争は、十二月一日の釜ヶ崎地域合同労働組合の炊き出しの會が中心になって行っている晝夜の炊き出しを朝晝晩の三回に増やし、その間に医療相談や労働相談を受けることから始まり、二月末日をもって一応終了いたします。この間に炊き出しに並んだ労働者は二六、五二二名、日平均一、九五食でした。この期間に必要なお米は殆んどがキリスト教協友会関係で集めたカンパとお米で支援することができました。また、夜間パトロールは十一月二十五日の夜から才十五回釜ヶ崎越冬闘争実行委員会と行動を共にし、一月十六日よりキリスト教協友会の独自の活動として行われました。その間にパトロールに参加して下さった人数は延八五四名、一晩平均一、九四名でした。カンパの総額は一、二四八、五四〇円。教会・修道会・学校・個人のみならず幅広くよせて戴き、おかげさまで、先に述べましたように炊き出しの會を援助し、越冬活動を乗りこえ、また、後述するように協友会の諸活動に使用することができました。年間を問わない皆さまのご援助に心から感謝申し上げます。

釜ヶ崎の一年

越冬活動を終えてからこの十二月までの一年を振り返ると今年も日雇い労働者にとっては楽な年ではありませんでした。春がきて季節的にはほっとしても四月五月は役所の会計の年度の始めとあって例年のように仕事はなく、更に六月七月の長い梅雨仕事は全くないというも過言ではありませんでした。あいりん労働センターには仕事の車の影さえ見え、ただぼんやり坐っている労働者の顔をみるのは苦しいことでした。最初から予測できることから実情を行政に訴えても、行政は行革で予算がないとの一点ばり、臨調行革とは弱い者いじめの別名であ

一九八五年〜八六年活動目標(前年度に続く)

- ① 仕事のない人に仕事を
- ② 食のない人に食を
- ③ 宿のない人に宿を
- ④ 病気の人は病院に
- ⑤ 協友会の活動の充実

り政府はそのために必死になるのかと思いたくなります。六月七月に炊き出しに並んだ労働者は日平均八百名を越え、このときもキリスト教協友会はみなさまからのカンパを大幅に使用させて頂きました。

梅雨も終りに近づいた七月一日、医療センター所長の本田良寛先生が亡くなりました。釜ヶ崎を愛し、釜ヶ崎が好きで、日雇い労働者の医療のために全力を注がれましたが、「貧しいから医者にかかれぬ。そんな馬鹿なことはない」と赤字を抱えての医療センター経営でした。日雇い労働者とともに追悼式が三角公園有志の手により八月十一日、行われたい。仕事着のまま、かけつけた労働者の姿と、遺影の横におかれたワンカップ「大関」が印象的でした。これからの釜ヶ崎医療は一段と厳しくなりそうです。

秋になると例年仕事が多くなるときですから釜ヶ崎の労働者の顔にも活気がでてまいります。その中であって最近の特徴は数年前から始つたドヤ新築ラッシュの速度が更に拍車を加えて来たことです。昔ながらの木造ドヤがどんどん壊されて近代的なビジネス・ホテル風のものが増えつつあります。やがて一泊千五百円が常識となるでしょうが、それでは病弱労働者、老人、障害者ほどに泊ればよいでしょう。釜ヶ崎のドヤの企業化。これが目につく釜ヶ崎の昨今です。また、それに伴い昔ながらの日払い現金の日雇い労働者の形態がくずれて、飯場に入る労働者が増えて来たということです。これは労働者派遣事業法が通つたので、飯場も労働者派遣事業所として公認されたということでしょうか。それならば昔のタコ部屋が合法化され、親方制度が復活し、ピンハネが認められたと同じことになってしまいます。そして貿易摩擦のおりを受け、米国からの古紙輸入でダン・ボール箱や新聞紙の値段の暴落、バター屋さんは一日歩き廻つても七、八百円の収入しか得られなくなつてしまいました。何れにしても経済大国を自認する日本が安い労働力を求め、それに頼ろうとするのは当然で、これを法で支えるようになればいつまでたっても、釜ヶ崎の日雇い労働者差別は悪か、如何なる差別問題も解消することはないでしょう。十月二十三日より二十五日まで東京で開催された国際シンポジウムで、日本の経済政策がアジアの差別問題、特に女性差別に大いに関係していると言及した、スリランカのケラニア大学教授ヘマ・グリーナティラケ女史のことばには謙虚に耳を傾けねばならないでしょう。東南アジアの国々では日本企業で女性が晝夜を問わず安い賃金で働かされているのです。

協友会の諸活動

釜ヶ崎キリスト教協友会のこの一年を振り返るとまた、さまざま



追悼式で後輩さんの遺影にお別れする日雇い労働者の群れ(8月11日)

な変化や発展がありました。

第一には喜望の家が新築され、ドイツ福音ルーテル教会よりワルター夫妻が酒害対策の専門家として派遣され、酒害に悩む日雇い労働者とともに本格的に活動を開始されたことです。新しい喜

望の家は十一月二十三日土曜日に祝福。オーブンいたしました。一階には相談室、娯楽室、工作室、二階には禮拜室、会議室、料理教室、宿直、宿泊施設等が完備され酒害者の光となっています。娯楽室はキリスト教協友会の越冬パトロールの拠点に使用させておく予定になっています。

喜望の家の新築に伴い山王子どもセンターが日本福音ルーテル教会の手から離れることになりました。今はドイツに帰られたエリザベス・ストロム宣教師の最初の活動、宣教の場であっただけに時は流れるの感があります。今はリーターと父兄の努力により山王子どもセンター存続の運動が起され、ますますふるさとの家で活動していた渡部宗正さんが、在世フランススコ会「出会いの家」を十二月十七日火曜日にオーブンさせました。この家は病弱労働者、老人、障害者の無料宿泊所とそのアフター・ケアの場として活動を始めました。これから寒くなる、寝るところのない労働者が増えてくるのが予想できるだけに、アシジのフランススコの精神を汲むこの家の活動が期待されます。

その他の釜ヶ崎キリスト教協友会の諸施設も夫れ夫れの活動の充実が努めてまいりましたが、そのためにみなさまのカンパは大きな助けでありました。例えば夏のキャンプは、子どもたちの楽しい思い出のとき、「子どもの里」も、「山王子どもセンター」も夫れ夫れ子どもに積立てをさせながら計画し、準備をいたしますが、出せないことも多いです。ただ、バスターの他が不足しますのでそれを協友会で補いました。また、夏祭りには日雇い労働者の男ばかりの盆踊り。今年は協友会の青年が幌島の屋台を出して楽しんで貰いました。更に十月二十日には三角公園で「子どもの里」主催の運動会があり、労働者も参加できるプログラムを組み好評でした。真顔になって走ることもと労働者。それを眺めながら声援するもの。その夜は協友会主催の野外映画会「男はつらいよ、ハイビスカスの花」。午後八時が過ぎると三角公園は肌寒くなつてまいりますが、五百名を越す労働者がコップ酒を飲みながらお互いに笑いあつて最後まで見物し、「また、頼むよ」の言葉を残して帰って行きました。釜ヶ崎の日雇い労働者にはみんなで生活を楽しむ場のないことがしみじみ感じさせられた一日でした。

今年一年、協友会が地域で活動する諸グループと力を合せて努力してきたのは、「生活センター」を作ろうとする運動でした。署名運動には六千名に近いキリスト教関係者が協力して下さいました。サラ金に追われダンボール箱を拾いパタ屋さんをしなから半年近くも天王寺公園で生活していた父子。今この人々に法の手をさしのべようとするなら、父と子を分けなければなりません。これは父と子にとって耐えられないことです。また、四つも公園があるのにその三つには金網が張りめぐらされ

て大人も入れず子どもは遊べず、わざわざ遠くの公園まで遊びに行き、帰途、踏み切りで電車にはねられ死亡してしまつた子ども。中学校を卒業してすぐ日雇い労働者に行き、「日雇い労働者のおっちゃん、総理大臣より偉い」と叫んだ少年。病弱で仕事も総合的な生活センターが要望されて来ます。新宮小中学校はもともといろいろな条件で不就学になつていたこともたちの学校でした。今は一般の学校でも不就学のことも受け入れるようになり、昨年春、廃校になりました。その跡地を生活センターに利用しようとしているのが今の運動であり、課題です。これが実現すればどれほど多くの問題が解決するのでしょか。最後にかねての念願であつた「釜ヶ崎白書」(83-84)を協友会の発行委員会の手で編集発行いたしました。購入講読をおすすめいたします。

冬がきました

今年もまた十二月がやつてまいりました。世間ではクリスマスとお正月を準備するのに忙しいときですが、釜ヶ崎は越冬の準備に追われるときです。昨年、キリスト教協友会は活動目標として、①仕事のない人に仕事を、②食のない人に食を、③宿のない人に宿を、④病気の人は病院に、そして協友会の諸活動の充実をかけたました。進展した面もありますが、日雇い労働者にとつて情勢は厳しくなつたと云えます。協友会は今年も昨年の活動目標を継続しながら問題の解決に努力を重ねて行きたいと思つています。



夏祭りで見える日雇い労働者(8月15日)

今、釜ヶ崎の中で野宿している労働者の姿は減つて百名前後です。しかし炊き出しに並ぶ人々は一日平均二百七十名で昨年より増えて、います。青カンパ野宿を強いられる労働者の数が減つてるのは飯場に行く労働者が増えたといわれるクリーン作戦で釜ヶ崎では寝る場所がなくなつた為と思われまふ。京都駅でもこの冬、再三、再四にわたる駅待合室に休んでいた失業野宿労働者が「浮浪者」と云われ追い出されたり、調査されたり、果ては逮捕されたりしました。

しかし、年末年始には釜ヶ崎で野宿を強いられる日雇い労働者の数は増えてくと予想されますので、今年もみなさまのご協力をお願いしたいと思います。

一 カンパ目標 一千万円

カンパによせられた金額は越冬のためばかりでなく、協友会の諸活動に用いられました。

二 物資の援助

越冬期間中(十二月二十五日より二月一杯、寒さに応じて三月の半ばまで)は毛布、蒲団、防寒着、オーバー、靴下などが必要となります。みなさまのお手許にありますもので送つて戴けるものがあれば

57 大阪市西成区北津守四一四四 曙光会 釜ヶ崎キリスト教協友会

にお送り下さい。尚倉庫の都合上十二月二十五日以後に着くようにして下さい。

ありがとうございます。



協友会通信5 1986年2月

釜ヶ崎キリスト教協友会

代表 薄 田 昇

557 大阪市西成区萩之茶屋3-1-10

連絡先

ふるさとの家内

釜ヶ崎キリスト教協友会連絡事務所

☎〇六十六四二一八七三三

カンパの

振替番号 大阪六一三〇五五九九

送り先

釜ヶ崎キリスト教協友会

一九八六年冬—釜ヶ崎からの報告

釜ヶ崎からの便り

大阪市に対する要望

A君 受験で忙しいとのこと。大学に入って法律を学び将来は弁護士になりたいとの希望。がんばってください。この世の中には人権をふみにじられ、神も仏もあるものかと悩み苦しんでいる人が多いのですから、その人々の立場に立って奉仕できる人になって下さい。



クリスマス・キャロル (85年12月23日・三角公園)

昨年とは越冬パトロールに参加したが、今年は受験勉強に追われて参加できなかった。せめて今年の釜ヶ崎の状況を知りたいとのこと。簡単に記します。

釜ヶ崎の年の暮

十二月、日本中がクリスマスマスのふんいきでにぎわっているとき、俺たちには苦しみま

ぶやく労働者。せめてささやかな楽しみをと映画会とクリスマス・キャロルの夕べをしました。映画は「浪花の寅さん」でしたが時間になると野宿していた日雇い労働者が次々にやってきて、酒を片手に最後までみて、またたのむよ。とよるこんで帰りました。更に二十三日には通称「角公園」で「釜ヶ崎キリスト教生活相談室」の入佐さんと「ふるさとの家」のチネカ神父が中心になり、やはり寒空に野宿を余儀なくされている労働者と共にたき火を開んでクリスマス・キャロルを歌いました。たき火の煙で汚れている顔に流れる涙のあとと手に持つローソクが印象的でした。

なぜこれほど沢山の日雇い労働者が寒空に野宿をせざるを得ないのか。これは明らかに労働福祉行政の責任です。

一九八五年〜八六年活動目標

(前年度に続く)

- ① 仕事のない人に仕事を
- ② 食のない人に食を
- ③ 宿のない人に宿を
- ④ 病気の人は病院に
- ⑤ 協友会の活動の充実

昨年十一月に釜ヶ崎キリスト教協友会は第十六回釜ヶ崎越冬闘争実行委員会その他の団体と共に大阪市に次のような要望事項を提出しました。

- 一、 臨泊入所数を千五百名以上保障せよ
 - 二、 入所について、雇用保険手帳の有無、及び「現在の」職業を問わない事
 - 三、 入所期間制限の廃止
 - 四、 年明け就労期の早朝バスの大巾増発
 - 五、 高齢就労不安定層については就労できるまでの宿泊手段を新設せよ
 - 六、 治安隔離収容政策を一切廃止せよ
 - 七、 警察の駐留、ガードマン、鉄条網の廃止、訪問、面会の無条件保証
 - 八、 民生局は越冬期の全市内の野宿者総数を調査しろ
 - 九、 医療施設及び医療の水準の低下を防止せよ(レベルアップさせよ)
 - 十、 隔離収容主義の精神病院の改革をはかれ
- 患者の通信、面会の自由を回復させよ
- これらの要望は無理なものではなく、野宿せざるを得ない労働者が人間らしく生きる最低の条件です。しかも行政がやる気になれば直ちにできるものなのです。しかし十二月二十三日の対市交渉は空しいものでした。市からは民生局保護課の二人の係長と環境保健局衛生係長が出席、約二時間半にわたり話し合いがなされたのに何も積極的な解答を得ることができませんでした。

春を待つ

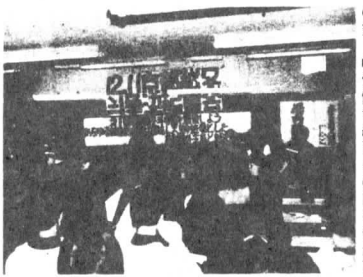
厳しい現実でありながらも年末年始は三角公園で年越しそばを共に食べ、又カラオケ大会、もちつき、ソフト・ボールをして公園は冬祭りの楽しいふんいきでした。そして夜はたき火を開き、野宿せざるを得ない日雇い労働者と共に時を過したのですが、その周囲には機動隊員が盾をもって並んでいました。やり切れない気持ちになりました。日雇い労働者にいつ春がやってくるのでしょうか。A君、世の中の現実をしっかりと見つけ、声の出せない人々の代弁者になってください。では又

一九八六年一月二十五日

Sより

第1回京都越冬闘争支援

83年冬、横浜での「中学生らによる日雇労働者虐殺」や「宇都宮病院の労働者虐殺」等をはじめとして、80年代における日雇・下層労働者への差別・治安弾圧が激化しています。84年東京都駅において「正月対策」として、浮浪者・差別キャンペーンがはらみ、「斉取り締め」が行われ、「野浪者」差別キャンペーンがはられました。84年中、工芸博や皇族・外賓等の訪問にあわせて5度にわたって「斉取り込み実施」鉄道公安による始末書処分63名・七条署による逮捕拘留14名という差別・治安弾圧があり、これに対して、京都では、部落解放同盟京都府連合会、釜ヶ崎日雇労働組合、東九条地域生活と人権を守る会、釜ヶ崎差別と闘う連絡会、日雇労働者の人権を守るキリスト者の会のよびかけにより、京都越冬闘争実行委員会が結成され、今冬初めて、85年12月20日より86年1月10日まで、対行政闘争、医療問題、労働問題、炊き出し、パトロールを中心に越冬闘争が取り組まれました。その中で、釜ヶ崎キリスト教協会として、過去、京都より釜ヶ崎越冬への支援協力、京都と釜ヶ崎の日雇労働者の関係の深さを考えカンパ活動、夜間パトロールを当然の事として支援協力しました。数々の現場で働き、及び京都駅で野宿した体験がある事が報告されました。このような事実がある中、京都越冬実の間に、京都市の重い腰をあげさせるといえず年末年始に中央保護所に臨時宿泊所をもつて24人入所できることになりました。京都の資本・行政が日雇労働者をこき使い、使いつてる事に対して、これは京都の問題であるというらえ方ではなくて、京都の問題であると同時に釜ヶ崎の問題であるという認識のもとに、共に怒りを覚え、釜ヶ崎キリスト教協会として、支援という立場をつらぬくと同時に、今の社会の矛盾に対して、現実を目的にしている者として共に青カン者の一人もいない、越冬をしなくともよい社会に向って進んでいくつもりであります。



京都越冬支援集会(85年12月11日京都)

出会いの家 オープン



出会いの家の前で(85年12月17日)

釜ヶ崎にお年寄り、障害者、病弱労働者の無料宿泊所とその方々のお世話が出来る「出会いの家」が二月十七日にオープンいたしました。釜ヶ崎には約二万人の労働者が居住しているのですが、過酷な労働をしているうちにケガをしたり、病気がなったり、いつの間にか高齢になっていたお年寄りの方々が数多くいらつしやいます。その人々に目を向け、共に歩み、共に苦しみ、共に喜ぶことが私達キリスト者には必要ではないかと考えています。宿泊所が必要であったのは、夜ゆつくり話しこみ、その人の本音を聞き、その方の気持ちにあった様に共に考えたいためです。釜ヶ崎の中には多い時には六五〇名も青カン(野宿)しています。又、現在青カンをしていなくてもいつその様な状態になるかもしれないという人々は未知数です。その様な方々をどの様にして底上げしていくことが出来るのか「出会いの家」の活動です。

支援者からの便り

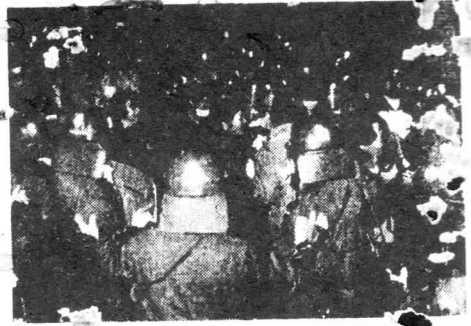
私は現在働かず、しかし、寝たきりの病人でもありません。三十年来のリウマチで、苦しい生活をしていきます。五年前から働かず、貧しい生活でも、なんとか食事も十分にいただく毎日です。釜の人々を思えば、恵まれていると思ひ、神様への感謝の証として、肌えん。沢山の方々に支えられて越冬活動を行っています。うれしいです。毎晩みそ汁をつくり毛布を持ってパトロールを行っています。ですが喜んでいただいています。二月一杯の予定です。どうぞみなさまご支援下さい。毛布、防寒具が足りません。

送り先 557 大阪市西成区北津守四一四四 映光会気付
釜ヶ崎キリスト教協会宛 よろしく。

越冬日録 '85 '86

10月27日、名古屋笹島労働者会館オープン
協友会からお祝いにかけて。11月3日、協友会1月例会、今月から越冬にそなえ例会は月々となる(第1・第3日曜日)。6日、越冬セミナー準備はじまる。11日、京都越冬準備会、協友会からも出席。23日、喜望の家新築オープン、断酒の家と再出発。25日、第16回釜ヶ崎越冬実打合せ会。12月1日、炊き出しの会、越冬に向けて二日三回(朝昼晩)炊き出し始める。2日・5・7日、協友会通信第4号全国発送約四千通。9日・10日、第1回釜ヶ崎実態調査工場旅路の里。14日、第16回釜ヶ崎越冬闘争支援運営集会。15日、協友会例会で、京都キリスト教越冬実行委員会上

り支援要請。17日、出会いの家オープン(責任者渡部宗正)。19日、協友会から阪奈病院の全入院患者(約五〇〇名)にクリスマスプレゼント。堺賢明学院高校生生活。22日、佐藤監督・周忌記念集会、東京釜ヶ崎労働者も多数参加。23日、三角公園でクリスマスキャロリングチネカ神父、入佐明美共催。25日、第16回越冬闘争実行集会、布田節、パトロール、医療相談、労働相談等はじまる。26日、協友会クリスマス。29日、大阪市臨時宿泊所受けつけ。結果としては申し込み約千三百名に対して、七百五強だけが入所、同夜越冬中間報告集会、労働者福祉切り捨てに抗議、三角公園を四百名の機動隊が包囲(参照「朝日ジャーナル」'86・124号、蒲田神父の投稿。31日・1月3日、第11回越冬セミナー(5名参加)。1日・3日、越冬つり(於三角公園)のど自慢あり、もちつき大会あり、ソフトボール大会あり。4日、3日臨時宿泊所で労働者西野さん急死に対する抗議デモを宿泊所と大阪市に対して行う。10日、第16回越冬闘争終了。京都越冬パトロールに協友会から応援。11日、今夜からキリスト教独自の越冬パトロールはじまる。毎夜、毛布、みそ汁、カイロ等もち午前0時から一時半までパト。13日、早朝東京山谷の組合リーダー山岡強一さん暴力団員にビストルで射殺される。2月2日、中間報告集会(主催・協友会)



機 撮 山 谷 争 議 団 員 ら (13 日 午 後 9 時 左 右)

山谷派出所へ火炎瓶 射殺で抗議

東京・台東区山谷地区で、活動している労働団体「山谷争議団」の幹部、同団一員(台東区日本堤)が、争議団のメンバーが銃で射殺された。争議団は、労働者の手配をめぐって地元警察から捜索されていると、午後五時過ぎに、争議団のメンバーが銃で射殺された。争議団は、労働者の手配をめぐって地元警察から捜索されていると、午後五時過ぎに、争議団のメンバーが銃で射殺された。争議団は、労働者の手配をめぐって地元警察から捜索されていると、午後五時過ぎに、争議団のメンバーが銃で射殺された。

山谷争議団のメンバー 通行中、射殺される



山岡 強一さん

新宿区は殺人事件として調べていたところ、現場から西へ約一、二キロ離れた新宿区北新橋二丁目の路上に、犯人に使用されたとみられる車が乗り捨てられていた。車のナンバーは、殺された山岡さんは、仲間二人と新宿区戸山に住む妻

犯人は組員?

どから犯人は暴力団構成員のメンバーとみられている。犯人は二十歳前後、身長一六五センチ、赤い上着を着ていた。殺された山岡さんは、仲間二人と新宿区戸山に住む妻

トラブル続発

労働組合の山谷争議団は一九七〇年代後半から暴力団系手配師の追放運動を続けている。昨年秋、同地区で同様の利権を握っていた暴力団幹部の金庫を盗んだ西戸組が手配師系にも進出、争議団とのトラブルが頻発した。同二月には、争議団と共同してドキュメンタリーフィルムを



山岡さんが射殺された新宿区大久保1の歩道

85/12/26

元気で正月を迎えよう

労組員ら越冬パトロール

西成のあいりん地区(森ヶ原)で、約五百人の労組員が、越冬パトロールを行っている。労組員らは、大雪や寒風による生活の不便を解消し、安全な越冬を支援している。パトロールは、労組員らが行っており、地域住民からの協力が得られている。パトロールは、労組員らが行っており、地域住民からの協力が得られている。



大阪社会医療センターの軒下に敷かれた布団は次々と壊れていく。西成区森ヶ原二丁目

協友会への物心 両面でのご支援 に心から感謝い たします。

越冬活動が75年より始まって早10年、その間支援の輪も年々拡がり、私達の活動も順調にきましたことは、一重に皆様方の変らぬご支援の賜と深く感謝しております。

釜ヶ崎の問題は越冬だけではなくことを越冬を通して新に認識し、年間の活動として取組むために越冬委員会より協友会へと継承されたことは皆様もご承知のことと思います。

協友会の年間活動もようやく軌道にのり、行政が切捨てて顧みない弱い立場の労働者や地域の諸問題について、具体的に労働者の福祉問題に取り組むことができるようになり、今後益々充実するよう努力を重ねて行きたいと思えます。

85年のご支援を感謝致しますと共に、今後のご支援を宜敷くお願い申し上げます。(会計 谷)

カンパ支援

1985年4月～1986年3月末

総計 1,120件 13,788,191円



地域	個人		教会・修道会		学校・諸団体	
	件数	%	件数	%	件数	%
大阪	129	22.8	109	23.1	13	16.9
近畿	145	25.2	123	26.1	26	33.8
中国	39	6.8	52	11.1	9	11.6
四国	14	2.4	22	4.8	5	6.5
九州・沖縄	55	9.6	95	20.1	20	26.0
東海	18	3.0	11	2.4		
関東	127	22.0	41	8.8	2	2.6
東北	16	2.8	6	1.3		
北陸・信越	15	2.6	2	0.5		
北海道	16	2.8	8	1.8	1	1.3
海外					1	1.3
合計	574	100%	469	100%	77	100%

編集者のあとがき

'85

越冬報告書のあとがきを記すころは夏を思わせる日ざしの強いとき。このあとがきは名古屋で記されています。寄場交流会が名古屋で行われるからです。窓の外では選挙の叫び声があちらこちらから聞えてきます。選挙なんだとの実感が多少とも湧いてきますが、選挙にも見放されている釜ヶ崎って行政にとっては一体なんだろうと思わされます。

昨夜（七月三日）「中村敦夫の地球発22時」を見ました。前回よりも労働者の姿とその声や怒りが映し出されています。前回は反省して少しでも内容を深めようとする態度に好感を持ちました。と同時に毎年同じように越冬問題に取り組むものによって問題を視る目とそれに対応する態度を深めるにはどうすればよいかと反省せざるを得

得ませんでした。テレビの中で一人が「そりゃ過去も語りたよ」と云っていましたが、過去を尋ねることをタブーとする寄場においても過去が尋ねられるようにすることは大切なことだと思いました。

(S)

＊

暑い。ムンムンと暑い。ここ1

ヶ月の間釜ヶ崎と周辺部では野宿を余儀なくされた労働者の数は少なく見ても五〇〇人を下らない。そんな中で6月9日～13日まで労働者が中心となって高齢、障害、病弱労働者の体と生活をもっと考えようということから行政に対する生活保障のたたかいがなされた（医療週間）。労働者を取りまく劣悪な現実が多くの日雇い労働者の足を市立更生相談所へ向け

させました。そこでもまた、役人がエラソーな顔をして「仕事いける。」としが70になったらまた来い」と。つい先日テレビで大阪市民生局のエライさんが市立更生相談所では年間二万七千人の方々に来ていただき：とうわ言のように言っていました。そのうち二万人は追い返されとんのに。あーゆーオッサンをわしらは「エータマ」とよんでいます。

(G)

＊

三〇四人。7月6日の衆参同日

選挙で当選した自民党衆議員の数は。改選前より五〇人も増えました。まさに絶体多数です。自民党が三〇〇人を越えたとの報道には、名古屋地方裁判所の第一号法廷前で接しました。7月7日は、名古屋越冬裁判の第18回公判の日でした。ロッキード汚職の有罪代議士が再選され「裁判所など信じられない」とうそぶいていました。でもその主張が何んとなく通用す

る時代です。しかし、一方、何百人もの野宿労働者に対する対策と責任を行政に迫ったら逮捕され、裁判にかけられます。もし、有罪になれば「あれは過激派」なんてレッテルをはって、その判決を正当化するのも今の時代です。その日公判の傍聴者は約五〇〇人。しかし裁判所は、一人一人に傍聴券を渡し、入口には法廷警備員が十数人もいるというものしきです。さらに法廷内にもすでに警備員が要所要所に座るといふ念の入れようです。

傍聴者は、日雇労働者、支援のキリスト者といった顔ぶれです。年配の労働者として婦人たちもいました。なぜ、こんな過剰警備が必要なのかと、公判中ずーっと考えていました。しかし、これが野宿する労働者の生活と生命をまもろうとする者に対する国家の否、今日の日本の大衆の回答です。昨年12月29日には釜ヶ崎でも三〇〇の野宿する労働者を弾圧するために六〇〇人も機動隊や私服警官が出動しました。(Q)

協友会通信 6 釜ヶ崎 1985年越冬

- 発行日 1986年7月25日
 - 発行所 大阪市西成区萩ノ茶屋2-8-9
旅路の里気付
 - 編集 「協友会通信6」編集委員会
 - 印刷所 (有) 木村桂文社
 - 頒 価 300円
-